

## あの写真

中一・土肥 暖葵

これで母を亡くしてから三度目のお盆。私は門のわきにある、迎え火のためのおがらを焚いた。

「これも三度目か…。」

未だに母が旅立ったことは受け入れられていない。夢には必ず母が出てくる。それも現実的な夢ばかりなので、余計に母の存在を感じる。一年目までは父も慰めてくれていたが、今では相手にされることもない。それは仕事の忙しさもあるだろうが対応の違いは誰が見ても一目瞭然だ。スマホの着信音が鳴る。おそらく父からの電話だ。私はスマホを手に取り通話マークにゆっくりスライドさせる。「父さん、今日夜遅くなりそうだから先に夕飯食べてくれ。夕飯は昨日のカレーの残りがあるだろうから適当によそって食べるんだぞ。」

「うん。」

「今日は勉強したのか。梨子は受験生なんだから、自覚持つんだぞ。」  
「分かってるって。」

私は電話を切るなり長い溜息をついた。自分でも分かっている。私は受験生なのだ。八月十三日。夏休みは受験生にとって正念場とかなんとか言われているけど、私には全く緊張感がない。台所に立ち、カレーを温める。お玉でカレーをかき混ぜるだけなのに涙があふれそうになる。

「いただきます。」

母の遺影を正面においてカレーを一口、口に入れた。味はそんなにおいしくない。さっきこみあげてきた涙があふれた。

「お母さんは何でそんなに早く旅立ったの。お母さんのカレーが食べたいよ。またお母さんと料理がしたいよ。どうしてお母さんは？」

カレーが口からこぼれそうになった。私はティッシュを一枚取るうとする。遺影が倒れる。

「ヴ、ヴ、ヴェーーーーーーン。」

赤ちゃんみたいに泣きじゃくった。こんな私がばかみたい。一度、冷静になる。

「私は何年生。」

そう一言言ってから、一気にカレーを口の中に詰め込む。

「ごちそうさまでした。」

母の遺影をもってソファへ向かう。スマホを取り出す。待ち受けは水族館で撮った母と私の写真だ。いつも見る写真なのに、また涙が出そうになる。画面をスワイプさせる。ホーム画面は家族三人で撮った写真。普段、あまり笑顔を見せない父がピースでこちらを向いている。画質は良く無いけれど、貴重な一枚だ。途端にラインの通知音が鳴る。数少ない友達からのラインのメッセージに喜びが走る。連絡が来たらすぐに見るよう、母から言われていた。ラインを開く。その瞬間梨子は驚きのあまりスマホを落としてしまった。そう。それは、あるうことか亡くなった母からのラインだったのだ。つまり、「死者からのメール」。薄気味悪いようだが、梨子は嬉しくてたまらなかった。鼓動を早めながら内容を確認する。

『梨子。久しぶり(´▽`)☆びつくりするかもだけどお母さんのの。やっぱりラインって便利よねえ。』

無駄に絵文字を使うところ。伸ばし棒を使わずに母音を使うところ。これは、間違いなく母からのラインだ。私は指を震わせながら返信をする。

『驚きというか、なんというか：。お母さんに会えなくて、つらい思いして。天国に行けば会いに行けるかもしれないか思っていたから、こうやってまた話が出来て、生きていてよかったと思うの。』母の既読は相変わらず早かった。

『梨子、そんなこと考えていたの。そしたらお父さんが可哀そうじゃない。お父さん、梨子の事まで失ったら絶望よ。そうそう。最近、お父さんはどう。』

私は正直、父の事が苦手だ。母が亡くなった時も父は表情を変えなかった。

『お父さんの事ならいつも通り何にも変わらないよ。』

『そうなんだ（笑）梨子はお父さんの事嫌いなね。そうだ。好きな人とかいるの。』

『いない、というかお母さんのことばっか考えていてそんなことまで気が回らなかった。』

ドアを開ける音がする。

「ただいま。」

父の声。いつもより少し高い声のような気もするが、そんなこと気にならなかった。

「母さん、帰ってきたか。」

「帰ってくるわけないでしょ。」

反抗的な態度をとったつもりでも、興奮する気持ちが上回って、声がかから回る。父は笑いをこらえているのか、ニヤニヤしていた。

「お風呂入るから、待っているんだぞ。」

何を待つのか分からなかったがそんなことも気にならなかった。珍しく、母の既読は遅かった。スタンプの連打をするも、既読にならなかった。父はお風呂から上がるところ言った。

「今日から、お盆だな。」

「うん。」

その後何か言うのかと思ったらそれだけだったので思わず吹き出しそうになった。ラインの着信音が鳴る。母からだった。

『ごめんね。久しぶりにスマホを触ったから昔の写真をふりかえっていたの。梨子、いい笑顔ね。』

たて続けにラインが入る。

『塾はちゃんと行くのよ。これは私からのお願い。』

私が塾を休みがちなことを知っているのだろうか。そもそも、母はどこにいるのが素朴な疑問だった。

『お母さんはどこにいるの。』

そのことについては答えてくれなかった。

『もう、こんな時間ね。おやすみ。』

おやすみなさいという猫のスタンプを送った。今日の会話を最初から振り返る。気づけば会話は二時間を超えていた。十四、十五日と塾がある。お盆だからと言って受験生に休みはない。私は母からの願いはどうしても叶えなかった。だから、ちゃんと塾に行った。

八月十六日。最近母とのラインが楽しみで早起きをする。

『おはよう。』

日常会話でありふれた言葉だが、それだけでも返事が待ち遠しかった。しかし、何分待っても既読はつかなかった。もしかして、今日塾がある事を把握しているのだろうか。いくら、ラインが繋がっていても会話が続かなければ面白くない。私は仕方がなく塾の用意

をした。

「雨、降ってるな。今日、塾だよな。送っていくぞ」

窓の外を見る。意外とザアザアぶりで驚いた。

「うん。」

素直にありがとうと言えなくなったのは、母を亡くしてからだと思う。母はどこにいるのだろうか。よく小さい子供に、死んだらお空の上に行く、とかいうけど本当なのだろうか。もしそうなら雨の日はどうしているのか、心配だった。気になって、仕方がない。車に乗り込んで考える。母の顔と場所がわかるには……。『テレビ電話』。我ながらに良い案だと思った。思いついてしまえば行動は早い。テレビ電話のマークを押す。満面の笑みで待ち構える。

「忘れ物、ないか。」

エンジンがかかった瞬間、車内に着信音が鳴り響いた。私は父がスマホを取る前に強引に奪った。電話の主は私だった。もう、何が何だかわからなかった。

「これ、誰のスマホ。」

声を荒げて父に問う。

「：やっちまった。」

父の声がいつもより小さいのが伝わる。

「なにが。どういう事。説明して。」

声量がいつもと違う。こんなに怒りが爆発したのは初めてだった。「ごめんな。母さんのふりして梨子との会話、普通に楽しんじゃった。初めは、お盆だし母さんが帰ってきたっていう体で梨子を喜ばせようとしたただけだったんだ。だけど、途中から父さんの方が楽しんでしまった。」

父のこんなにも弱々しい声は初めて聞いた。車の通る音がする。

---

「馬鹿だよ。お父さん……。私は本気で信じて本気で喜んでさ。お父さんの思うつぼじゃんか……」

涙と鼻水で顔がぐしゃぐしゃになる。こんな顔誰にも見せられない。

「でもさ、父さん悔しかったよ。正直。今まで何度説得しても塾に行こうとしてくれなかったのに、母さんの一言では行くんだなって……」

「いや、それは……ごめん……。知ってると思うけど私、異常なほどお母さん子だから。お母さんの言うことは聞こうって……でも、なんかこれで目が覚めた気がする。お母さんは本当にいないんだって。だから……ありがとう。ようやく分かった。」

「そんなことは……ない。」

父が照れているように見えた。こんな不器用な父が母のラインを必死で真似て、私を喜ばせようとしてくれたことは何だか変な感覚で今でも信じられない。

「雨、やんだみたいだけど塾、どうする。」

「行くに決まってるじゃん。一応、お母さんからのお願いなんだから。」

父と私は笑った。父の笑顔がまた見られた。あの写真よりも満面の笑み。母もこの笑顔を見ていて欲しいと願った。空にはきれいな虹がかかっていた。それが、母の作った笑顔にみえた。

---